

古町地区城下町旧町名板の設置事業について

はじめに

この事業は、熊本城築城400年にあわせ、魅力ある街並み形成を図るため、「城下町散策町図」(平成17年度)で紹介している新町・古町地区を対象に、地域住民との協働で、新町地区では平成18~19年度に、古町地区では平成20~21年度に「旧町名板」の設置を行っている。また、この事業は、平成17年度に策定された「熊本駅都心間協働のまちづくり事業」の関連事業である。

旧町名板設置の経過と目的

1 経過

古町地区は五福校区と慶徳校区に分かれており、デザイン案の意向集約が課題であった。各校区で検討、そして合同会議での最終確認を経て、古町地区として同じデザイン画に集約することができた。各会議では、古地図の時代や色、向きなどにこだわること、そして現在との違いを明示することなどが重要であることを確認し、デザイン画を修練させていった。

その後の設置箇所や説明文については、将来の管理のために、各校区それぞれに地元主導で行われた。

2 背景

(1) 古町の歴史

400年前当時の町割

古町は、城下町として新町と共に今から400年前に加藤清正によって建設された。蛇行する白川・坪井川の改修が行われ、一辺120mの碁盤目状の一町一寺の画地割りに整備された。廃寺もあるが、現在でも25の寺が宅地に囲まれるようにある。

古町の変遷

古町は町人町として形成され、細工町・桶屋町・紺屋町など作って売る店、呉服町・米屋町・魚屋町のように町名に由来する様々な商品を扱う店が並んだ。坪井川による舟運、明治24年九州鉄道(春日-高瀬間)開通、大正13年市電開通により、ますます流通の拠点性は高まった。明治期、様々な商店の他、銀行、芝居小屋が立地し、唐人町は花の唐人町と言われるほど繁華街、問屋街としてにぎわった。大正14年に行われた国産共進会(熊本市三大事業記念博覧会)を機にその会場であった二十三連隊跡地(市役所南~産文会館一帯三万坪)は市街地整備による機能集積が進み、都心は新市街へ移っていった。昭和5年、紺屋町(現在の商工会議所)に八

木デパートが開業するが13年に廃業。結果として問屋街の性格が強まり、現在に至っている。慶徳小は明治7年、五福小は8年に開設されており、熊本市で最も歴史ある小学校である。

また、熊本市内では都心に近いことからマンションが多い地区であるが、近年さらに銀行・卸問屋・病院跡などに大型マンションが建設され、人口減少には歯止めがかかるが、その一方で街並みは大きく変化している。

(2) 町名の変遷

古町地区は新町と異なり、多くの町名が400年前の当時のまま現存する。今回旧町名表記の基礎としたものは「古町之絵図：天保十一年(1840)前後(推定)(新熊本史別編第一巻絵図 p194.195)」である。その中で町名が異なるのは、現町名で河原町、松原町の2町であり、共に旧町名で「新古川町」と表記される。また、時代によって別名がある通りもあり、小沢町の「竹の馬場」、魚屋町の「白灰町」などがそれである。

(3) まちづくりの現状

平成3年の五福地域開発センター開設を機に組織された五福ふれあいまちづくりの会は「すり鉢舞い」の復興、「風流街浪漫フェスタ」の開催、閻魔まつりの復活開催、白川河川敷清掃などに取り組む。

平成14年4月慶徳校区では慶徳まちづくり委員会が組織され、慶徳コミュニティセンターを拠点に子どもたちの白川カヌー教室やキャンプなどに取り組む。今年度は地名研究会の方を講師に招き、歴史勉強会を開催した。

古町地区ではこの2つの組織だけではなく、桜町地区会議や五福風流街商栄会、五節供の会などがあり、子どもたちが元気に、お年寄りがいきいきと暮らせる生活環境の回復を目指した活動がなされている。

また、平成23年の新幹線開通に向け、魅力あるまちづくりを進める熊本市との「熊本駅都心間協働のまちづくり事業」は、新町地区と連携した取り組みを進めている。

3 目的

この旧町名板は、以下の3点を目的としてデザインを作成し、設置するものである。

街並みや歴史を感じさせる。

まちの中に「まちの色」や「旧町名」を表出することで城下町「古町」を意識させる。

まち案内促進

熊本城築城400年を機に、歴史勉強会の成果を活かしたまちの紹介を行う。

暮らしに活かす

子どもたちや新住民がまちを知る機会づくりや位置を教える場合の指標とする。

旧町名板のデザイン

1 町名板の構成

町名の表示 町名の由来 寺名の表示 寺の案内 地の色
アイキャッチ色 地図 古町の表示 以上、8つの要素で構成する。

2 全体デザイン

- ・ 古町色と町名は、街区形状を示す正方形で表現し古町らしさをイメージさせる。
- ・ 歴史感あふれる古地図ベースの地図と明るい古町色による構成により新しい文化を取り入れながら古き良き伝統を大切にするという意味を強調している。
- ・ 説明文の下地を白とすることにより文を強調し読みやすくする。

3 構成要素デザイン

町名の表示

- ・ 現町名を大きく表示する。
- ・ 地図中の町名は絵図に記載されたままとし変化の有無を明確にする。
- ・ 地図中に、現町名の境界と現在地を表示し、町の範囲を表示する。
- ・ ローマ字、ハングル、ひらがなを町名に並べ表記する。

町名の由来

- ・ 町名の由来を簡潔にまとめ読みやすさを向上し多くの人に見てもらえるよう考慮する。

寺・院名の表示

- ・ 地子、寺内などは省略し、寺、院名のみを絞ることで明確化を行う。
- ・ 文字の色を古町色とリンクさせ地図との兼合いを考慮し、瑠璃紺とし地図内で目を引き付ける。
- ・ フォントを町名と変える（HG 正楷書体-RR0）ことで違いを明確にする。

寺の案内

- ・ 町名由来と同様に寺の案内を表示する事により古町の特徴を強調する。

地の色

- ・ 鳥の子色を使用する。
- ・ 古地図のイメージと重なる。
- ・ 古地図の雰囲気を変えず、発色の良い古町色の下地としても適している。

アイキャッチ色

- ・ 古町色（青、伝統色名：群青色+洗練）
- ・ 青は、誠実さや信頼できる職人の技の「職」をイメージする。
- ・ また、金箔地の屏風に、群青色を用いて描いていた伝統美術が、かつての金・銀細工師の町の「飾」を連想できる。
- ・ 紺色より明るいため新しさや洗練さを表現でき、新しい文化を取り入れながら古き良き伝統を大切にするという意味で『古町色』とする。C85 M85 Y0 K0
- ・ 今回の絵図の色調に合わせた古町色としてC97 M97 Y0 K0



地図

- ・ 古町之絵図、天保十一年(1840)前後(推定)(新熊本史別編第一巻絵図 p194.195)を基にする。地図内町名・寺名は1840年推定絵図のままの記載とする。現在の寺名との違いが生じるので説明文の下部に「現存する寺」として記載する。現在の町名は で記載したとおり。
- ・ 方位も古地図と同じ角度に傾け表現を行う。
- ・ 古地図を基本とすることで、町割を残しながら発展を遂げてきた城下町らしい雰囲気強調する。
- ・ 古地図の色を手掛りに、伝統色をあてはめた配色を行ない古地図らしさを失わないように配慮する。その上で古町の特徴である寺を強調する。
- ・ 古地図と現在の市電路線を重ね、現町名の境界を記入することで、現在地点の所在把握の手がかりとし、わかりやすくする。

古町の表示

- ・ 町全体の呼び名「古町」を古地図名「古町之絵図」で表現を行う。
- ・ 400年前に清正侯が築いた町であることを「清正が築いた城下町」と表現し、清正のシルエット及び家紋を同時に表現する事により強調する。

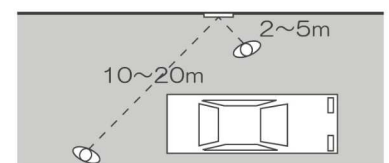
4 文字のサイズと字体

サイズ

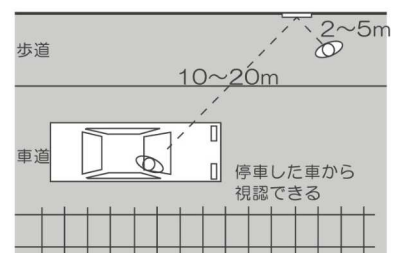
- ・ 「町名」6.5cm 角を基準：15m程度からの視認性確保
- ・ 「説明文」1.5cm 角を基準：3mからの視認性確保

字体

- ・ 「地図中の町名(HG教科書体)」：多数の情報の中で読み取りやすく地図の雰囲気壊さない書体。
- ・ 「町名・絵図名・寺名(HG正楷書体-PRO)」字に強弱がついているため、歴史を感じさせながら目を引く書体。
- ・ 「電停名・町名説明文・振り仮名等」(ゴシック体)：歴史的に区分するために現在のものに使用。説明文は小さくても読みやすくなるようにゴシック体とする。



新町の通りの路地に設置する場合



電車通り等の歩道際に設置する場合

5 全体統合したデザイン

- ・正方形で表現した古町色(紺)とその中の町名がまず目に入る大きさ、配置とする。
- ・地図は通りを中心とした「町名区分」が判りやすく、絵図のような歴史を感じさせる色調とする。
- ・加藤清正の都市計画によるまちづくりを強調するためにイラストを配置する。



Koya Amidaji - machi
고야 아미다지마치
こうやあみだじまち

紺屋阿弥陀寺町

こうやまちに接した阿弥陀寺町で、たびかさなる洪水により細工町へ移転した阿弥陀寺門前の町筋であった。